

工業の発展に貢献できること。これらの条件が満足できないと失敗するそうである。

5. お わ り に

これまではアジア NIES の製品の品質が悪く、日本の製品に匹敵するようになるためにはかなり時間がかか

るだろうと思っていた。しかしながら、今回の比較的長期の、しかも種々バラエティに富んだ見学を通じて認識を新たにした。日本と匹敵する品質管理が行われており、技術的にも高度になりつつある。今後日本はこれらの国々と競争しなければならなくなる。より高度な技術力が必要である。

コ ラ ム

学会の会費と会員数

日本工学会という学会がある。この学会は工学および工業関係学術団体の学会、協力等が正会員であり、会員相互の協力により工学および工業上の進歩発達に資することを目的とし、明治 12 年 (1879) に設立された。現在 70 人以上の学協会が入会しており、鉄鋼協会も日本工学会の正会員である。この学会の年報を見ると日本の工学系の学会の様子がよく分かる。

現在私たちは正会員数約 9000 名の鉄鋼協会に入っていて、年額 9800 円の会費を納入している。よその学会に比べて会員数は多いのか少ないのか、会費はどのようなだろうか。最近入手した日本工学会年報から、年間 6 回以上の機関誌や論文掲載誌を発行している 67 の学協会について調べてみると、下記のような図ができあがった。

個人会員数 3 万人をこえるマンモス学会は四つある。ビッグスリーは日本機械学会、日本化学会、および電子情報通信学会で、いずれも明治、大正の時代に

設立された。会員数が 1 万人から 3 万人までの間に、土木学会、日本建築学会、自動車技術会、電気学会、応用物理学会、物理学会など歴史の古い学会がある。鉄鋼協会は上から数えて 16~17 番目で、相撲番付の幕内力士に例えれば小結か前頭筆頭位であろうか。また個人会員数 5 千人以下の中小の学会が全体の 2/3 近くを占めている。

正会員の会費は、10000 円を超える学会もかなりあるが、8000 円台の学会が最も多い。鉄鋼協会はこれで見ると平均よりやや高めといえる。

鉄鋼協会の正会員数はここしばらく年々減少の傾向にあり、会勢の衰退が技術開発の活力減退を招くことが懸念され、積極的に会員増強を計るべき事態にある。

個人会員数 3 万人を超えるもう一つの学会は、情報処理学会で、昭和 35 年に設立されている。聞くところによると、ここしばらく年々大幅に会員数が伸びているらしい。会員を増やすには、やはり時流に合った魅力ある学会にしていかなければならないのであろう。なおこの学会の会費は、9600 円で鉄鋼協会とほぼ同額である。
(住友金属工業(株) 高橋政司)

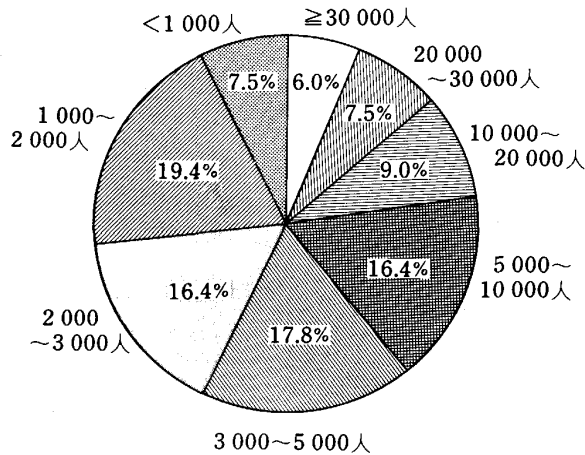


図 1 所属会員数と学会数比率

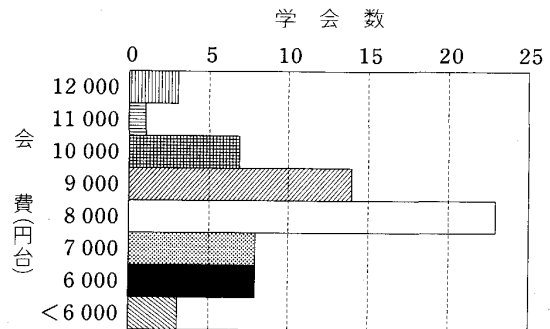


図 2 学会費と学会数